



マンハッタン金融街で休憩中に見上げた空

休憩「コーヒー」

先日、アメリカ人照明家の先輩が、「日本では「コーヒープレイク」ってあるの?」と聞いてきました。その先輩は仕事とプライベートで日本へ何度も訪れていて、日本文化に大きな敬意を抱き、常に日本について多くを学ぼうと努力が絶えないので、いつもよりリラックスした質問に少し可笑しくて場が和みました。日本人は本当に働き者で全く休憩しない印象があるようです。

ニューヨークの照明業務における休憩についてはユニオンや照明会社によりけりですが、一般的に8時間労働では1時間の食事休憩と、2時間から3時間置きに一度の15分間休憩、通称「コーヒープレイク」があります。たとえば、朝8時から働き始めたら10時15分くらいに第一回目の休憩があります。コーヒーを飲む飲まないに関わらず、休憩のことを「コーヒー」と通称してしまうほどコーヒーそのものが休憩の代名詞となっていて、大体照明チーフが「Let's have a coffee.」と言って休憩が始まります。(ちなみに休憩の終わりは「Okay, we are back.」という掛け声が代表的な例です。)制作現場での「コーヒー」という言葉は、日本で言うところの「一服」に近いでしょうか。アメリカでも喫煙者が多かった頃から休憩を取る習慣はあったはずなのに、休憩の代名詞に「スモーク」が抜擢されなかったのは、啜るタバコで照明を吊ることが当たり前だった40年前の影響かもしれません。わざわざ休憩時間までタバコを我慢する必要がなかったから休憩の代名詞は「スモーク」でなく「コーヒー」になったのでしょうか。

とはいえアメリカ人全員がコーヒー好きかというそうでもなく、エスプレッソ、紅茶、ココア、コーラ、スパークリング・ウォーターなど嗜好はさまざまで、その具

体的な注文に応えるのに時間がかかることもあります。さらにニューヨークは公共の建物内以外にも、セントラルパークやタイムズスクエアなど公園やビーチを含む野外での喫煙を法律で禁止していて、しかも喫煙所がなく、喫煙者は飲み物を持って施設の外の道路まで行って一服する必要があります。というわけで、15分の休憩はあっという間に終わります。

現場の進行状況によって皆がいつせいに休憩を取ることができないこともあります。休憩を取らずに働き続けることは稀です。食事休憩中に舞台上へ上がることを禁止するユニオンもあります。もし休憩が取れなかったら、制作者はユニオンからペナルティ(代替えの食事と飲み物の調達と罰金)が課せられるか、ユニオンに属さない仕事では「休憩もなくして最悪だった」と後ろ指を指されるかもしれません。休憩に重きを置く理由は、集中力の持続のため、現場監督者不在中の労働を認めない安全管理体制確保のため、そして基本的人権の尊重のためだと考えられます。特に皆が社会的に平等でなくてはならないという意識は、人種や性別、年齢の違いから休憩を認めなかった植民地時代、奴隷制、そして女性蔑視の歴史からの反省が影響しているようです。

先述の「日本では「コーヒープレイク」ってあるの?」という質問には、「あるよ」と答え、茶とタバコなどで一息入れる「一服」という言葉と、缶コーヒーというアメリカにはない日本の文化を紹介しました。先輩がこの質問をされたのもコーヒープレイク中で、休憩中の社交性は仕事をよりスムーズに運ぶ大事な要素といえるかもしれません。コーヒーからひも解く異文化交流、もっと奥が深そうです。